教育の幅を広げる「完全小中一貫校」の可能性

特集

義務教育学校

本格的な春を迎え、少しずつ新たな環境にも慣れてきたという方も多いと思います。今回は、令和４年４月に開校した比布町の義務教育学校（完全小中一貫校）「比布中央学校」の体制、取り組みについてお伝えします。

社会に羽ばたく準備の場

人が成長するためには、「時間」と「経験」が必要です。このことは、多くの皆さんが職場や子育てで実感されていることと思います。

義務教育は、社会に出るための準備の場です。義務教育は9年間と定められていますが、これまでの義務教育は小学校と中学校の別々の学校で行われてきました。そのため、同じ義務教育にもかかわらず、成長の時間が区切られていました。

平成28年施行の「改正学校教育法」で誕生した新たな学校種「義務教育学校」は、小学校、中学校と並ぶ3つ目の学校形態です。

義務教育9年間という時間を最大限に使って子どもたちの成長を促し、社会に羽ばたく準備をする学校です。

教育目標

生きる力を身に付け
他者と共に
よりよく生きる児童・生徒の育成

～グローバルAI時代を生き抜くために～

社会が変われば準備も変わる

「社会が急激に変化している」と言われて久しいですが、社会が変われば当然、準備も変わらなければなりません。成人年齢が20歳から18歳へと引き下げられた現在、義務教育を修了してからわずか3年後には、大人としての責任を求められることになります。

そのため、これまで以上に義務教育段階での準備が重要になっています。

「もう引き継ぎましたから」をなくす

これまでの小・中学校のつながりは、病院で例えれば、別々の病院同士が紹介状で引き継ぐような形でした。

当然、患者さんの症状は人それぞれ違いますので、引き継ぎは簡単にできるものではありません。

そのため、患者さんに不測の事態が起こったとき、最初の病院の治療に問題があったのか、引き継いだ後の対応が悪かったのか、原因の所在があいまいになり、ときには責任を押し付け合うことにもなりかねません。

学校も同様に、例えば困りごとが深刻化したお子さんに対し、小学校は「もう引き継ぎましたから」と言い、中学校は「もう少し育ててから引き継いでほしい」と言うような関係性になってしまうことが起こり得ます。

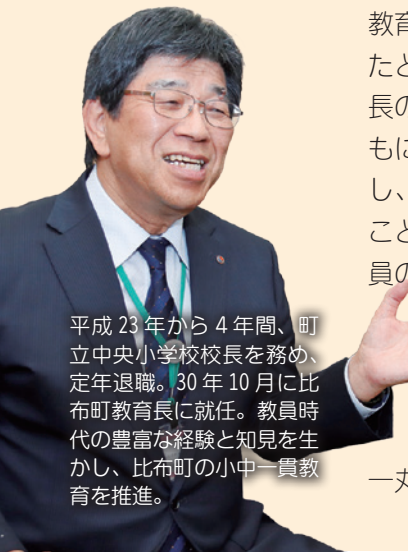
もちろん、こうしたことが常に当てはまるわけではありませんが、個々の職員が懸命に頑張っていても、別々の組織が同じ目的に向かって協力することはとても難しいものです。このことも、多くの皆さんが社会で体感されていることだと思います。

同じ病院でチームを組み、それぞれの専門家が計画的に治療にあたるような体制。変化する社会に対応し、一つの組織で社会への準備を行う場。これが「義務教育学校」です。

比布中央学校では、全ての教職員が、1年生から9年生を「自分の学校の子ども」として関わる体制になっています。

比布中央学校開校当時を振り返る

比布町教育委員会
教育長 北川 範之

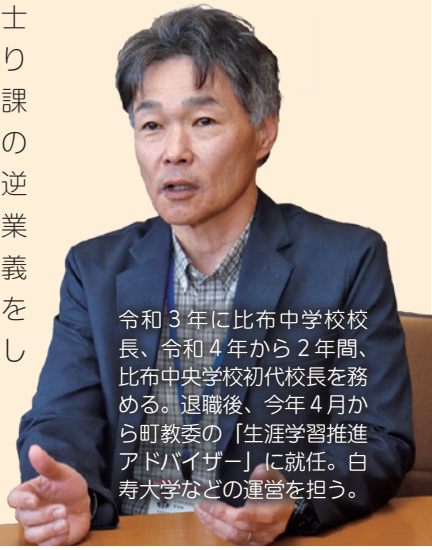


平成23年から4年間、町立中央小学校校長を務め、定年退職。30年10月に比布町教育長に就任。教員時代の豊富な経験と知見を生かし、比布町の小中一貫教育を推進。

小・中学校が分かれていると、子どもの成長を切れ目なく支えることが難しくなります。義務教育9年間をどうつなぐか考えたとき、比布町では、一人の校長のもと一つの組織として子どもに関わるのが望ましいと判断し、「義務教育学校」へ移行することを決めました。最初は教職員の中にも戸惑う声がありましたが、「子どもの成長」を最優先に考え、話し合いを重ねる中で理解が進み、開校に向けて教職員が一丸となって取り組みました。

以前は「小学校から中学校へ送り出す」という感覚でしたが、校舎が一つになり「義務教育学校」となったことで、教員同士の情報共有や子どもへの関わりがぐっと深まりました。前期課程を教えていた教員が進級後の様子を自然と気にかけたり、逆に後期課程の教員が前期の授業を見学する姿もありました。義務教育9年間を通して子どもを見守れるのは、大きな変化でした。前期課程と後期課程、渡り廊下でつながる距離感も、ちょうど良く感じています。

比布中央学校
初代校長 三浦 秀也
（比布中第32回卒業生）



令和3年に比布中学校校長、令和4年から2年間、比布中央学校初代校長を務める。退職後、今年4月から町教委の「生涯学習推進アドバイザー」に就任。白寿大学などの運営を担う。

社会に向けた比布中央学校の準備

比布中央学校では、義務教育修了後の目指す姿を定め、目標に到達するために、さまざまな取組み、成長のステップをつくっています。

入学式・進級式 ～真の主役は7年生

150人近い人の前で、自分の思いを話した経験を持つ人は、どれほどいるでしょうか。

比布中央学校では、入学式は1年生、卒業式は9年生のみが対象です。一般的に中学校で行われる入学式はなく、その代わりに、1年生の入学式と合わせて7年生の進級式が行われます。

進級式では、新7年生一人ひとりが、在校生や保護者・来賓など150人近くの前で、自分の言葉で後期課程への抱負を述べます。

生徒がマイクを持った瞬間、会場は静まり返り、その緊張感が伝わってきます。中には緊張で言葉に詰まってしまう生徒もいますが、自然と会場から「がんばれ、がんばれ」と小さく励ます声が聞こえてきます。その励ましに背中を押され、意を決して話し始める姿に、ひときわ大きな拍手が送られます。

社会で求められる力の一つに、「自分の思いを伝える力」、「前に踏み出す力」があります。この進級式は、まさにそうした力を育む場であり、うまく話せた生徒も、思うようにいかなかった生徒も、それぞれがかけがえのない経験を積んで義務教育修了までのカウントダウンをスタートさせます。

これまでの学校では、新年度の主役は1年生ですが、比布中央学校における真の主役は、7年生です。

一般的な中学校の1年生にあたる7年生は、「中学校生活のスタート」ではなく、「義務教育の仕上げの3年間の始まり」という、特別な意味を持っています。

進級式の様子

「時間の使い方を工夫して勉強と部活を両立したい」「志望校合格に向けて予習・復習を徹底したい」「全道・全国大会を目指して練習に励みたい」など、新7年生それぞれの言葉で、さまざまな抱負が語られました。

成長を止めない

これまでの義務教育では、6年生から中学1年生に進学する際、「成長が一時的に止まってしまう」という課題が指摘されてきました。

小学校では最上級生としてリーダーシップを発揮していた子どもたちが、中学校に進学すると最下級生になるため、これまで積み上げてきた経験が継続されない、という課題です。

繰り返しになりますが、義務教育の目的は、社会に羽ばたくための準備です。9年間は、長いようであっという間です。さらに、成人年齢が18歳となった現在、子どもたちにとっては一日一日がとても貴重な時間です。だからこそ、成長を止めている余裕はありません。

比布中央学校が6年生の卒業式は行わず、後期課程への進級式での経験を重視しているのは、義務教育修了までのラストスパートに向けて、子どもたちの意識と成長を加速させるための取り組みです。

高校受験の変化 ～受験準備は7年生から

近年、高校入試の状況が劇的に変わっています。特に顕著なのが、推薦入学の増加です。

かつて公立高校では、多くの生徒が3月上旬の一般入試に臨むのが主流でしたが、最近は推薦入学の枠が大幅に増え、年によっては学年の約7割の生徒が推薦入学で高校へ進学する状況です。

一般入試が主流の時代は、中学3年生の部活動引退後から猛勉強を始めるという光景

もありましたが、推薦入試では中学校3年間の評価が重視されるため、その時期から頑張っても間に合わないということになります。

一見、推薦入学は「苦しい受験勉強の負担が減る」ように思われますが、実際は3年間の学校生活すべてが評価対象となるため、より早い段階から準備が必要です。

こうした変化に対応するため、比布中央学校では、後期課程の教員が前期課程の生徒を指導したり、7年生の授業を前期課程の教員が担当することで、勉強の引き継ぎを円滑にするなど、義務教育9年間の連続性を大切にしています。

さらに、町と包括連携協定を結んでいる「練成会グループ」の協力のもと、5年生以上の保護者を対象に最新の受験情報を共有する場を設け、家庭と学校が一体となって子どもたちを支えています。

他にも、9年生の修学旅行報告会に5・6年生が参加し、進級後の自分をイメージできるようにしたり、合唱交流会で9年生の圧倒的な表現力に触れる機会を設けるなど、子どもたちが将来を見据え、自分の成長を重ねていける環境づくりを進めています。

これらの取り組みは、義務教育学校だからこその強みといえます。

子どもの成長のために得意を持ち寄る

近年、「教員の働き方改革」が報道されることがありますが、比布町では、教員の働き方改革を強調することはしません。

なぜなら、人口減少が進む現代において、どの業界でも人手不足や情勢の急激な変化など、それぞれに大変な苦労があるからです。教員だけが特別に過酷とは言えません。

大切なことは、どの仕事にも苦労や困難さがあるのだという意識を持ち、感謝と敬意を持って接すること。働き方改革は、教員だけでなく全ての働く人に必要なことです。

また、得意なことや苦手なことは人それぞれです。当たり前のことですが、人から学ぶ時には、その分野が得意な人から教わるのが一番深く学べる方法です。

公立学校の教員は、決して特別な経験や訓練を受けた人が就く職業ではありません。当然、知らないことや苦手なこともたくさんあります。

比布中央学校では、田植え・稲刈り体験をはじめ、さまざまな場面で町民や専門家の皆さんの力を借りて学びの場を広げています。

これは決して、教員の働き方改革が目的ではなく、「得意な人から学ぶ」経験をつくることが目的の取り組みです。

こうした活動を通じて、子どもたちは、家庭や他の学校では得がたい貴重な経験を積み重ねています。その背景には、皆さんが「自分の得意」を持ちより、子どもたちのために力を貸してくださっていることがあります。

皆さんのこうしたご協力に、心から感謝いたします。

大人が得意を持ち寄り、寄ってたかって経験の場をつくる。それが、比布中央学校が目指す姿です。

これからの比布中央学校

これまで、比布中央学校の目指す姿や取り組みの一部を紹介してきました。

もちろん、全てが完全なものではありません。現在の取り組みはあくまで「子どもたちの成長を促す」ための手段であり、その手段が本来の目的に合っているかを、常に確認していく必要があります。

また、社会が大きく変化し、子どもたちに求められる経験が多様化する中、町民や専門家の皆さんのご協力がこれまで以上に必要な場面が増えていくことも想定されます。

「子どもは地域の宝」と言われますが、忙しい毎日のなかで、自分の子ども以外のために時間を割くというのは、簡単なことではありません。

それでも、子どもたちの成長には多くの経験が必要です。どうか無理のない範囲で構いませんので、引き続き皆さんの経験や得意なことを、比布の子どもたちにお伝えいただき、社会に羽ばたくお手伝いをいただきますよう、お願いいたします。